上顎洞にみられた黒色真菌症の1例

鈴木浩之・小松寿子・橋本賢二

A case of chromoblastomycosis of the maxillary sinus

Hiroyuki SUZUKI・Hisako KOMATSU・Kenji HASHIMOTO

Abstract: Chromoblastomycosis of the maxillary sinus is a very rare condition. In this report, we presented a case of chromoblastomycosis of the maxillary sinus in a 30-year-old female. Under general anesthesia, a radical sinusotomy of the left maxillary sinus was performed.

Macroscopically, the sinus contents consisted of dark-brown necrotic tissue, partly with calcification. Microscopically, the foci contained fungal elements. These organisms had a thick wall and sclerotic bodies were present.

The patient's postoperative course has been uneventful to the present date.

Key words: mycoses (真菌症), chromoblastomycosis (黒色真菌症), maxillary sinus (上顎洞)

緒 言

副鼻腔真菌症は比較的まれであるが、近年抗菌剤の頻用により、その発生は増加傾向にある。しかし、その原因菌は *Aspergillus* がもっとも多く、ついで *Mucor*, *Candida* の順¹⁾であり、黒色真菌の感染による副鼻腔真菌症の報告は、われわれが検索した限りでは1例のみであった²⁾。今回われわれは30歳女性の上顎洞に発症した黒色真菌症を経験したのでその概要を報告する。

症 例

患 者：30歳 女性。

主 訴：左側頬部痛および鼻閉感。

初 診：1993年2月■日。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

職 業：事務職。

現病歴：1992年12月頃より左頬部の違和感を自覚し始めた。2か月ほど放置していたが症状に変化がないため近歯科医を受診したところ、X線写真上の異常を指摘され、当科を紹介された。

全身所見：体格中等度・栄養状態良好。

臨床検査成績：特記事項なし。

浜松医科大学医学部歯科口腔外科学講座
(主任：橋本賢二教授)

Hamamatsu University School of Medicine Department of Oral and Maxillofacial Surgery
(Chief: Prof. Kenji Hashimoto)

受付日：平成5年5月24日

Fig. 1 Waters X-ray photograph demonstrating a diffuse density involving the left maxillary sinus.

Fig. 2 Panorama X-ray photograph demonstrating a diffuse density, partly with calcification, involving the left maxillary sinus.

Fig. 3 Microscopic appearance of the curettage material showing necrotic foci. H & E (×10)

Fig. 4 Microscopic appearance of the curettage material showing necrotic foci with sclerotic bodies. H & E (×100)

Fig. 5 Grocott positive fungal elements and sclerotic bodies (×50).

Fig. 6 PAS positive fungal elements (×100).

顔貌所見：特記事項なし。

リンパ節所見：特記事項なし。

口腔内所見：左側上顎第1大臼歯は根管充填済みであり、軽度の打診痛が認められた。

X線所見：Waters 法において左側上顎洞に比較的均一な陰影を認めた (**Fig. 1**)。また、パノラマ X 線撮影法では石灰化物と思われる不透過像を認めた。左側上顎第1大臼歯根尖が上顎洞内に突出していると考えられた (**Fig. 2**)。

臨床診断：左側歯性上顎洞炎。

処置および経過：3月■日当科入院。■日、全身麻酔下に通法に従い上顎洞根本手術を施行した。大歯窩より開洞したところ上顎洞内は黒色または茶褐色、一部緑色で石灰化を伴った壊死様物質で充満していた。悪性腫瘍を疑い、迅速病理診断に供したが、悪性所見は認めないとの報告を得たため、洞粘膜および内容物を除去し、洗浄、対孔を形成し、抗菌剤入り軟膏ガーゼタンポンを填入し、創を閉鎖した。術後、抗菌剤の投与を行ったが、術後1週間経過した時点で摘出材料病理組織標本により黒色真菌症と診断されたので抗真菌剤フルコナゾール (ジフルカン®) を内服にて併用し、術後経過は良好であったため3月■日退院した。術後3か月の現在、問題な

く経過している。

病理組織学的所見：エオジン好性の壊死巣を取り巻くように暗褐色の真菌塊が存在していた (**Fig. 3**)。菌糸は隔壁を有したものと球形または卵円形で、暗褐色の厚い壁を有した大型の sclerotic bodies とを認めた (**Fig. 4**)。また、これらは Grocott 染色、PAS 染色陽性所見を示した (**Fig. 5, 6**)。

病理組織学的診断：左上顎洞黒色真菌症。

細菌学的検索：術中、真菌感染症を疑わなかったため、培養検査は施行しなかった。

考 察

黒色真菌症は数種の黒色真菌によって引き起こされる感染症で皮膚および皮下組織に好発する。もっとも高頻度に分離される菌種は *Phialophora verrucosa*, *Phialophora pedrosoi*, *Cladosporium carrionii* などであるとされ³⁾、広く世界中にみられ、特に熱帯地方に多いとされている⁴⁾。日本でも比較的多く発生しているが、人口比発生率には地域差がかなりあり、Fukushiro ら⁵⁾ は、皮膚に発生した黒色真菌症、全296例中140例が関東地方、49例が中部地方に認められたと報告しており、関東・中部地区に多発しているようである。

副鼻腔真菌症は上顎洞にもっとも多く発生し、ついで篩骨洞、前頭洞に多い。また菌種別では、増田ら¹⁾は1955年～87年を文献的に考察したところ、*Aspergillus* がもっとも多く、*Mucor*, *Candida* の順であったと報告しているが、黒色真菌症が上顎洞に発生したとの報告は、われわれは検索した限りでは1例しか認められず²⁾、本真菌症の上顎洞での発生はきわめてまれであると考えられる。

確定診断は本来ならば培養検査によってなされるべきであるが、本症例では悪性腫瘍を疑い、培養検査を施行しなかったため、病理組織学的所見より本診断を得た。増田ら¹⁾は鼻・副鼻腔真菌症114例を検討し、そのうち真菌培養を行った症例は73例で、真菌を同定できたのは14例(19%)で、その同定の困難さを指摘し、確定診断のほとんどが病理組織学的所見によるのが現状であることを報告している。そこで、少しでも真菌症が疑われた場合は、その検出率の高低にかかわらず真菌培養を施行すべきであることは論を待たない。副鼻腔真菌症の治療は、大部分が手術的に行われており、抗真菌剤を使用しなくても完全な病巣の除去と適切なドレナージにより完治するといわれている¹⁾。また、まれに血行伝播により脳に2次感染し、脳膿瘍を形成し致命的経過をとることがあるが、一般に病巣は局所に限局しており予後は良好とされている⁶⁾。

本症例は上顎洞根本手術を施行、術後、予防的意味を含め内服抗真菌剤を3週間ほど用いたが術後3か月を経

過した現在、経過良好である。

結 語

今回われわれはきわめてまれな、上顎洞に発生した黒色真菌症を経験したのでその概要を報告した。

稿を終えるに臨み、ご指導、ご校閲を賜りました本学第1病理学教室梶村春彦助教授に深謝いたします。

引 用 文 献

- 1) 増田はつみ, 岡田康司: 鼻副鼻腔真菌症一症例報告と文献的考察一. 耳 喉 頭 頸 60: 415-420 1988.
- 2) Yamamoto, H. and Caselitz, J.: Chromoblastomycosis of the Maxillary Sinus. Arch Otorhinolaryngol 242: 129-133 1985.
- 3) Jawetz, E., Melnick, J.K., et al: 医真菌学. 小松信彦, 大谷 明監訳; 微生物学(下). 第17版, 広川書店, 東京, 1991, p 483-513.
- 4) Gruber, B., Rippon, J.W., et al: Phacomycotic cyst (Chromoblastomycosis) of the Neck. Arch Otolaryngol Head Neck Surg 114:1031-1032 1988.
- 5) Fukushima, R.: Chromomycosis in Japan. Int J Dermatol 22: 221-229 1983.
- 6) 木村貞夫, 山口淳二, 他: 真菌. 現代の医微生物学. 第2版, 金原出版, 東京, 1987, p 317-349.